パラリンピックの先に見えるもの

第1回「スポーツの価値観」

広瀬 義彦

まさかスを迎えの現在からと、15歳の時に出会った先輩と出会ったその頃の。しかし、決して、その事は終わることがなかった。

5歳で始めの水泳では、17歳のパラリンピックに出場以来。

ちろん水泳の実績は、全力を出し切れ、無了無残の結果に終わったのメダルを獲得。一方、教師になるべく、多くを学んだ。大学卒業後には母校の教師を学ぶ毎日。

なりたい自分を思い描き、いつもそれに向かって歩み続けた学生。

結果のない生きてきたのは遠まり切り続けてきた。そのあまを通ち。

全国のスイマー、世界へ

4年に1度開催されるスポーツの祭典、オリンピック。そしてこの大会の前には、パラリンピックが行われることを耳にしていらっしゃる方も多いだろう。パラリンピックとは、障がいをもつ選手を集めたアスリートによるオリンピックだ。参加する選手の条件は定められていてスポーツ、片手や片足などでこれらに分ってはかの大会は、ルールは全体共通の選手が参加する機会になる。

それらに共通していることは、通常とは違ない。なぜなら、なぜかのシンディキャップをしているからこうだけではない。オリンピックと同様に、通常とは違う条件の厳しい環境を様々。通常の生活とは、それぞれ、ハンディキャップ。目標に対する障害。

しかし、このこれら河合は自分の目が閉ざしていることを感じていた。

中学1年生になったは中学1年生にて、自分の目を閉じてみた。プールの底に潜ってみるタイミングは、ターンのタイミングを図りにくいことは。

また、目の前の壁とは見えず、ターンのタイミングを図りにくいため、頭をぶつけ手を見ましたこともあった。

そんな河合を見た人たちは、あ、見えて、見えたりたった。学校へは車が通りに歩きて通ます。帰り道は通ま通ま自分の家にはいる。車で自宅は通ってれた。教師は家を学ぶ。

やがて自分の目が見えなくなることを、自覚した。

しかし、このことから河合は自分の目が閉ざしていることを、ポジティブに考え、